

「研究論文」

小学校英語教育における海外の学校との交流学習にむけた ビデオレター制作活動への教師の支援に関する探索的研究

Exploratory Research on Teacher's Support for Video Letter Production Activities Aimed
at Exchange Learning with Overseas Schools in Elementary School English Education.

倉田伸・喜多伊吹・鈴木章能・中村典生・松元浩一（長崎大学）

Shin KURATA, Ibuki KITA, Akiyoshi SUZUKI, Norio Nakamura, Kōichi MATSUMOTO

1. はじめに

近年、日本の初等中等教育において遠隔・オンライン教育が求められている。2020年から蔓延したCOVID-19の感染拡大防止対策の一環として遠隔・オンライン教育に注目が集まったのが理由の1つである。ここでの遠隔・オンライン学習とは、「遠隔教育システムを用いて、同時双方向で学校同士をつないだ合同授業の実施や専門家の活用などを行うこと。また、授業の一部や家庭学習等において学びをより効果的にする動画等の素材を活用すること」（文部科学省2021）であり、遠隔・オンライン教育には同期型と非同期型の形態があることを示している。これらより、遠隔・オンライン教育が同期型と非同期型の両形態とも求められていると言える。

初等中等教育における遠隔・オンライン教育は、一般的には各教科の授業で実践される。その中でも、小学校外国語科・外国語活動（以下、小学校英語教育）では、英語の暗記だけではなくその背景にある海外の文化を捉え、相手意識を高めた対話をとおして「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を身につける必要があるという理由から、海外の学校との交流学習が期待されている。海外の学校との交流学習としての同期型の遠隔・オンライン教育の実践事例としては、例えば、中村ら（2020）のハワイ・オアフ島と五島の小学校との英語による交流学習がある。ここでは、海外の学校との遠隔・オンライン教育が子どもたちの学習意欲を高めるという可能性が示された。非同期型の遠隔・オンライン教育の実践事例としては、例えば、福岡県田川市教育委員会（2022）のビデオレターを用いた英語による交流学習がある。ここでは、英語での会話や対面での発表が苦手な子どもたちも、自分が英語を話す姿を撮影することで事前に十分な準備が可能であることから、安心して活動に取り組むという利点が示されている。さらに、同期型と非同期型の両形態を組み合わせた遠隔・オンライン教育の実践事例としては、茂木（2014）のテレビ電話およびビデオレターをとおしたオーストラリアの小学校との交流学習がある。ここでは、テレビ電話の利点として「相手と1対1で会話を楽しめる」、「相手の目を見て、話ができる」、「すぐに返事が来るからいい」、ビデオレターの利点

として「リアルタイムじゃないから、緊張しない」、「落ち着いて話すことができる」、「仲間と一緒にやる方が楽しいし、安心できる」、「画像の乱れが少なく、相手に伝えやすい」といったことが示された。なお、ここでのビデオレターとは、遠隔・オンライン教育の一環として相手にメッセージを伝えるために送る動画のことである。ビデオレターを用いた非同期型の遠隔・オンライン学習（以下、ビデオレター交流学习）は、「英語の楽しさ」、「嬉しさ・達成感」、「英語に対する自信・意欲」を得る学習効果があり、自分の思いをつたえるための英語を学ぶことができると言われている（井上ほか 2014）。したがって、特に、英語のスキルが不十分な小学生にとって同期型の遠隔・オンライン教育は難しいと考えられるため、ビデオレター交流学习は小学校英語教育における海外の学校との交流活動の導入段階として有効な手段だと考えられる。

小学校英語教育における遠隔・オンライン学習への期待は高いが、子ども同士の交流であるため、手厚い教師の支援が必要不可欠である。倉田ら（2022）は、小学校英語教育における海外の学校との交流学习として同期型の遠隔・オンライン教育で行う際に教師が留意すべきことを整理した教師用チェックリストを開発した。このチェックリストによって、海外の学校と同期型の遠隔・オンライン教育を行う際に教師の留意すべき支援内容が示された。しかし、制作したビデオレター交流学习を実践する際に教師が留意すべき支援内容は現在の時点では明確に示されていない。特に英語による発表を撮影しビデオレターを制作する活動（以下、ビデオレター制作活動）は、同期型の遠隔・オンライン教育と学習形態が全く異なる。もし、ビデオレター制作活動への効果的な教師の支援内容を示すことができれば、小学校英語教育におけるビデオレター交流学习の発展につながる可能性があるため、検討する意義がある。

そこで本研究では、小学校英語教育における海外の学校との交流学习にむけたビデオレター制作活動の際に授業者が留意すべき支援内容を示すことをねらいとする。そのために、ビデオレター交流学习の支援経験のある教師へのインタビュー調査をとおして、教師の支援内容をリスト化することで整理する。なお、本研究は一般化できる教師の支援内容の可能性を検討するのではなく、教師の支援内容に関する分析結果の転移可能性を検討する探索的研究として位置付けた。

2. 調査・分析方法

調査方法は、ビデオレター交流学习への支援経験をもつ教師1名に対するインタビュー調査である。調査対象となる教師は、インタビュー調査の時点では小学校勤務歴21年であり、韓国とアメリカの2カ国とのビデオレター交流学习に取り組んだ経験を持つ。そして、調査対象の教師と第一著者はラポールが築かれており、率直なコメントを得られることが期待できた。インタビュー内容

は、鄭・久保田（2006）の e ラーニングを実践する教授者が身に付けておくべきスキルを参考にし、ビデオレター制作活動時の「子どもの発表に対する留意点」と「教師からフィードバックする際に意識したこと」を中心に調査した。

分析方法は、インタビュー調査結果を質的データ分析手法の SCAT(大谷 2019)で分析した。SCAT は比較的小さな規模の質的データで理論化できるため、調査対象者が 1 名であるという特徴の本研究に適した分析手法であると判断し、採用した。なお、ここでの理論とは一般的・普遍的原理のことではなく、あくまでもデータから言えることであり、本研究のような探索的研究に必要な知見である。分析の流れは以下のとおりである。

- <1> : インタビューから得た言語データの中から着目すべき語句を抜き出す。
- <2> : 抜き出した語句を言語データの中にはない言葉で言い換える。
- <3> : 言い換えた言葉を説明するための語句や概念に置き換える。
- <4> : 本研究のテーマをふまえ、それに構成される概念に置き換える。
- <5> : 疑問・課題を出す。
- <6> : <4>で記述したテーマを紡ぎ合わせて文章化しストーリーラインを書いた後、ストーリーラインを元に理論記述を作成する。

3. 結果・考察

ビデオレター制作活動への教師の支援内容に関する SCAT 表を表 1 に示す。表 1 のように、[1. 英語での発表スキル不足]、[2. 撮影時の視覚的情報の追加]、[3. 伝わりやすい非言語情報への意識]、[4. 発表に対する不安感]、[5. 撮影のリメイクの許可]、[6. リラックスした状態で発表する]、[7. 子どもの特性を踏まえた発表順の工夫]、[8. 発表に対する明るいうリアクション]、[9. 発表に対する教師の称賛]、[10. 正しい英語表現でのリキャスト]の 10 個の構成概念が得られた。1 は多くの子どもが英語の語彙力不足などの英語スキルが不足しているということ、2 は英語での発表を支援する視覚的情報を準備すること、3 は発表時に大きめのジェスチャーや豊かな表情を意識すること、4 は英語での発表に多くの子どもは不安感を抱いているということ、5 は発表の撮影の取り直しを許可するということ、6 は撮影中に子どもの笑いを誘いリラックスさせるということ、7 は子どもの特性を考えて撮影する順番を工夫するということ、8 は発表を聞く側の子どもたちが発表に対して明るいうリアクションするよう促すということ、9 は教師が発表に対して可能な限り褒めるということ、10 は撮影中の誤った英語の表現に対し教師がさりげなく正しい英語表現で言い直すということである。

これらの構成概念を「子どもの英語スキル不足を補うための支援」と「撮影時の子どもの不安感を解消する支援」の 2 種類に分類し、表 1 の理論記述を作成した。「子どもの英語スキル不足を補うための支援」として、具体的な支援内容が 3 つ示された。1 つ目は、イラスト・写真・実物などの視覚的情報を使って発表さ

表1 ビデオレター制作活動への教師の支援に関する SCAT 表

話者	テキスト	<1>	<2>	<3>	<4>	<5>
聞き手	授業内容を情報発信する際に重要視されていたこと。例えば情報を伝えるっていうときに絵で示したりとか、いろいろあると思うんですね。それを遠隔授業の動画とかで伝えたいもの、素材を情報発信するときに気を付けておいたほうがいいとかあるのかなという質問です。					
教師	日本の文化を伝えるときには、もうさっき言った絵とかインターネットから引っ張ってきた画像、それも動画を撮るときには一緒に、子どもが立っている横にはそれが映るみたいな。だからその言葉だけでは、やはりボキャブラリーも少ないので、小学生、やっぱりイメージが湧くようなものを横に添える。	ボキャブラリーも少ない/イメージが湧くようなもの	英語の語彙力が無い/視覚的に理解できるものを準備	英語のスキル不足/視覚的情報の追加	英語での発表スキル不足/撮影時の視覚的情報の追加	
教師	あとは、もうとにかくジェスチャーを大きくして言ってました。体使って、顔とか表情もですね。典型的なことでしょうけど。それくらいですかね。	ジェスチャーを大きく/顔とか表情	大きなボディアラングージ/豊かな表情	誇張された非言語情報伝達	伝わりやすい非言語情報への意識	
聞き手	動画で萎縮するっていうか。					
教師	結局、1人で映るから、残りの子は机に座って見ているわけですよ。このシチュエーションになるわけですね。どうしても、1人がみんなの前でやるっていうのは、ただでさえ緊張するのに、しかもカメラで撮られてる。だから、もうそこに一発勝負なことではなくて、その前にたくさんあると思っても、その直前にもさせる。	ただでさえ緊張する/一発勝負なことではなくて	過度な緊張感/何度も取り直せる	不安感/リテイクが可能	発表に対する不安感/撮影のリテイクの許可	完璧な発表を求めすぎる子どもへの対応は？
教師	そして撮るときにも、はい、行くよっつって、3, 2, 1とか言いながらしても、とにかく笑いを入れていくんですよ。はい、駄目とか言って。テイク2とか言って、ほぐしながらやるって感じですかね。	笑いを入れていく	緊張をほぐす笑い	リラックスさせる	リラックスした状態で発表する	
教師	そのために順番も考える、子どもたちにさせる順番を。名前順とかっていうのもあるけど、ほぐしてくれる子を先にやったり、その間にちょっと大人しめの子を入れて。	順番も考える	発表順への考慮	子どもの個性を考慮した発表順	子どもの特性を踏まえた発表順の工夫	
教師	今度は聞く側のほうを盛り上げてあげて。別にこれが入ってもいいと思ってたので、ビデオメッセージの中に、机に座ってる子どもたちがうおーとかって、そういうリアクションをさせることでまた乗ってくるので、そういうのを工夫したりとか色々しましたね。	聞く側のほうを盛り上げてあげて	聞き手が発表を盛り上げる	明るいリアクション	発表に対する明るいリアクション	大勢で発表を注目することで緊張することへの配慮は？
聞き手	フィードバックに関するところで、何か気を付けていることはありますか。					
教師	私が思い付いたのは、もう肯定的なフィードバック。もうそのトライでいいんだと。こっちで文法的なことはもちろん指導しないから。	肯定的なフィードバック	褒める	称賛	発表に対する教師の称賛	
教師	でも、ちょっと違うところはこっちで言い直したりとか、よくあるじゃないですか。言い直してあげて、それを耳で聞かせるとかですね。	言い直したり	正しい英語への言い直し	リキャスト	正しい英語表現でのリキャスト	どこまで正確性を求めるか？

ストーリーライン ([1]内の数値は3.で示した構成概念の番号と対応している)	教師は、[1. 英語での発表スキル不足]への支援として、[2. 撮影時の視覚的情報の追加]をしたり、[3. 伝わりやすい非言語情報への意識]を促したり、[10. 正しい英語表現でのリキャスト]を行ったりする。[4. 発表に対する不安感]への支援として、[5. 撮影のリテイクの許可]や、[6. リラックスした状態で発表する]支援をしたり、[7. 子どもの特性を踏まえた発表順の工夫]を考えたり、[8. 発表に対する明るいリアクション]を待機している子どもに促したり、[9. 発表に対する教師の称賛]を多く行ったりする。
理論記述	教師は、子どもの英語スキル不足を補うため、撮影時に視覚的情報を見せるよう予め準備したり、ジェスチャーや表情などの非言語情報を強調するよう促したり、子どもが英語表現を間違えた場合は教師がさりげなく正しい英語表現でリキャストしたりする支援が有効である。また、撮影時の子どもの不安感を解消するため、何度も撮影をリテイクできるようにしたり、発表する子どもをリラックスさせたり、子どもの特性を踏まえて発表順を工夫したり、発表を聞く子どものリアクションを取り入れたり、発表への称賛をできる限り行ったりする支援が有効である。

せるという支援である。このことによって、子どもの英語に関するボキャブラリー不足を補うことができる。2つ目は、ジェスチャーや表情などの非言語情報を強調するよう指導する支援である。自分の発表を目の前で撮影されるという非日常的な状況であるため自然な発表ができず、ボディランゲージや豊かな表情が失われてしまう危険がある。ビデオレター送信先の子どもたちに対し自分の言いたいことを伝えられるよう、大きめのジェスチャーや豊かな表情を意識させるような指導が必要である。3つ目は、発表中に子どもが間違った英語表現に対して正しい英語表現でさりげなく言い直すという支援である。相手に誤解させるような間違いをしてしまった英語表現のまま発表を撮影することは、自分の意図と異なる内容が相手に伝わるだけでなく、その間違いがずっと記録されることになってしまうため、できる限り避けたい。しかしながら、教師が子どもの間違いに対する直接的な指摘を繰り返してしまうと、子どもが極度に間違いを恐れてしまい、ビデオレター制作活動への悪影響が出てしまう可能性もある。相手に誤解させるような間違いは避けるべきだが、それと同時に必要以上の間違いへの指摘も避けるべきである。

「撮影時の子どもの不安感を解消する支援」として、具体的な支援内容が5つ示された。1つ目は、事前に撮影の取り直しを許可するという支援である。もし撮影の取り直しができないと、発表する子どもは極度に緊張してしまい、ビデオレター制作活動への悪影響が出てしまう可能性がある。完璧な発表を求めることは良くないと考えられるが、子どもがある程度納得するまで何度も発表をやり直すことができるという条件で子どもに安心感を与えることが重要である。2つ目は、発表する子どもの笑いを誘いリラックスさせるという支援である。緊張している子どもに対して教師が「緊張するな」と指示したとしても、子どもの緊張感が解消されないのは自明である。撮影中、教師は子どもの笑いをうまく誘い、和やかな雰囲気の中でビデオレター制作活動を進めていくことが望ましい。3つ目は、発表の順番を工夫するという支援である。例えば、1番目に発表する子どもは、その後に発表する子どもたちに比べてより緊張感があると予想される。発表する順番をうまく組み合わせ、子ども全員が良い状態で発表に臨めるよう工夫することも有効である。4つ目は、発表を聞く側の子どもたちにもリアクションをさせるという支援である。基本的にビデオレターは、相手が目の前にいない状態で子どもが1人で英語を使って発表するという特殊な状況であり、このような発表に慣れていない子どもが多いと予想される。発表しやすい雰囲気を作るために、待機している子どもたちが発表を聞き、適宜明るいリアクションを返すという状況を作ることが望ましい。ただし、あまりにも大勢の子どもが発表を注目している状況になってしまうと、逆に発表する子どもの緊張感を過度に高めてしまう恐れがあることに留意するべきである。5つ目は、子どもの発表に対して可能な限り褒めるという支援である。子どもたちは使い慣れない英語を使って発表しているため、常に不安な状態であると予想される。そのような不安感を解消するために、教師はどんなに小さなことでも良かったことを褒め、子どもに自信を与えることが重要である。

4. まとめ

本研究では、小学校英語教育における海外の学校との交流学习に向けたビデオレター

制作活動への教師の支援内容を整理することを目的とし、インタビュー調査結果を分析して支援内容をリスト化した。その結果を以下に示す

- 子どもの英語スキル不足を補うための支援
 - イラスト・写真・実物などの視覚的情報を使って発表させる
 - ジェスチャーや表情などの非言語情報を強調するように促す
 - 子どもが間違った英語表現に対して正しい英語表現でリキャストする
- 撮影時の子どもの不安感を解消する支援
 - 撮影のリメイクを許可する
 - 発表する子どもの笑いを誘う
 - 発表の順番を工夫する
 - 待機中の子どもは適宜発表に対しリアクションするような状況を作る
 - 子どもの発表に対して可能な限り称賛する

今回は探索的研究であるため、上記のリストは一般的・普遍的な内容ではないが、本研究の成果が小学校英語教育における海外の学校との交流学习の発展の一助になりうる。今後もビデオレター制作活動に関する学術的な知見を探求していくことが求められる。

謝辞

本研究に関わった皆様に深く感謝いたします。また、本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業 20K02795 の助成を受けております。

参考文献

- 井上桃子・山本長紀 (2014). 児童が求める国際交流—日本・オーストリア間の交流授業の実践報告—。小学校英語教育学会誌, 14(1), 50-65.
- 大谷尚 (2019). 質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで—。名古屋大学出版会。
- 倉田伸・大山璃子・鈴木章能・中村典生・松元浩一 (2022). 小学校英語教育における海外の学校との遠隔授業のためのチェックリストの開発。長崎大学教育学部教育実践研究紀要, 21, 55-62.
- 鄭仁星・久保田賢一 (2008). 遠隔教育と e ラーニング。北大路書房
- 中村典生・倉田伸・松元浩一・鈴木章能 (2020). ICT を用いたハワイ・オアフ島と五島の小学校の英語交流授業について。長崎大学教育学部紀要, 6, 141-147.
- 福岡県田川市教育委員会 (2022) 田川市授業での ICT 活用実践事例集 3. https://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/kiji0038085/3_8085_27469_up_zmytmooq.pdf (2023 年 3 月 31 日)
- 茂木淳子 (2014). 外国語活動における ICT 活用とその効果。教育実践研究, 24, 25-29.
- 文部科学省 (2021). 遠隔教育システム活用ガイドブック第 3 版。文部科学省。 https://www.mext.go.jp/content/20210601-mxt_jogai01-000010043_002.pdf (2023 年 3 月 31 日)